

水稲あとキャベツの省力化と安定生産に向けた支援

大津・南部農業農村振興事務所農産普及課

【普及活動のねらい・対象】

大津市の農事組合法人Aは、経営の複合化をめざし、平成25年から水稲あとほ場でキャベツ栽培を開始されました。しかし、水稲あとでの湿害の回避や、育苗・追肥作業の省力化等による生産コスト低減が課題となっていました。そこで当課では、ほ場の排水対策、底面給水育苗と被覆緩効性肥料による省力施肥技術の提案と実践に向けた支援を行いました。

【普及活動の内容】

生産コスト削減に向けて、JA担当者と協力し、同法人に底面給水育苗の導入を提案しました。打合せをかさねて法人に技術内容の理解を深めてもらうとともに、底面給水による育苗管理技術の習得支援を行いました。また、あと作にキャベツが予定されているほ場では水稲作付中から中干し時の溝切り本数を増やす排水対策を提案して実践してもらいました。

また、キャベツほ場での施肥は、前年度に当課で実施した調査研究の結果を示し、麦や大豆で使用されている被覆緩効性肥料の活用により、追肥作業を軽減した省力化技術を提案し、実践を支援しました。

【普及活動の成果】

底面給水育苗の導入支援の結果、育苗時のかん水にかかる労働時間がゼロになり、全自動移植機による定植に適した健苗が育成できました。また、追肥作業の労働時間は、これまでの21.3時間/10aから2.8時間/10aへと大幅に削減でき、総労働時間も、113時間/10aから74時間/10aへと削減できました。溝切り本数を増やしたことで、畝立て直前に激しい降雨があったにもかかわらず、ほ場準備は順調に進み、9月3～4日にかけて定植作業が完了しました。

これらの対策を支援した結果、最終の収量は昨年度の2.8t/10aを上回る4.9t/10aとなる見込みで、同法人の作業担当者は今回実施した各技術の効果を確認されました。ただ今作では、ヒコバエによる基肥の収奪や長雨による肥効の低下が問題となり、今後は作付前のほ場管理や肥料の効果的利用の検討が必要と考えられました。

当課では、水田での露地野菜の作付が安定し、地域農業のスタンダードとなるよう、今後も支援を継続していきます。



写真1 底面給水育苗



写真2 キャベツの収穫作業

◎対象者の意見

育苗ではそろった苗ができ、管理も手間がいらなかった。ただ、水稲あとではワラが残り、定植作業がしづらいのが難点。（法人構成員）